

1. 調査に至る経緯と調査の位置

姫路市総社本町64番地において、集合住宅の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡のうち、姫路城中曲輪南東の不明門に北接する武家屋敷地にあたる(図5)。また、播磨国府の最有力候補地である本町遺跡の範囲にも含まれている(図4)。

このことから、平成25年1月20日に1×3mのトレンチ2ヶ所を設定して確認調査を実施したところ、現地表下約1.1mより江戸時代後期の土坑を検出した(図3)。このため、開発者と保存協議を行い、遺構に影響を及ぼす範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。

調査範囲は基礎掘削範囲11ヶ所、調査面積は24.69㎡である(図3)。



写真1 不明門跡、中庭跡(北から)



写真3 2～6区 SK03断面(南から)



写真4 1区 SK01(東から)、出土須臾器 図2 実測図 S=1:8

2. 調査の成果

現地表面から約1.1mの盛土を掘り下げた標高12.6m付近で遺構検出を行ったところ、1～6区及び9区～11区で土坑を検出した。このうち、1区SK01、11区SK07、SK08、SK09からは、奈良～平安時代の須臾器、土師器、瓦などが出土した。なかでもSK01では8世紀の長頸壺を確認したが、土坑のプランが切っている上層にも古代の瓦や土師器片が含まれていた。このことから、遺物は2次的な混入品である可能性が高く、土坑の時期は判然としない。ただ、長頸壺は磨耗がほとんどないことから、本町遺跡に関連する遺構が付近に存在したことは確かである。

また、2～6区、9区、10区のSK02～05は、江戸時代後期の時期があてられる。これらの土坑はプランが6区でしか検出できず、確認調査のTr.1も含め埋土の色調や土質が近似していること、底のレベルが11.8m前後でほぼ一致するなどの理由から、全てが同じ大型土坑の範囲内であることも考えられる。出土遺物は染付磁器(碗、皿、徳利)、磁器香炉、陶器(碗、急須、行平、すり鉢、甕)、瓦、貝殻、鹿角などである。鹿角は、根元および一節目の直上に切断痕跡がある。用途は不明であるが、あるいは工芸品などの材料であったのかもしれない。

11区SK06及び、確認調査Tr.2の土坑は、江戸時代後期の遺物が出土しているが、埋土の状況などから幕末～明治時代になる可能性もある。

このほか、7区、8区では、調査区の西端で基盤層である暗灰黄色砂礫層のレベルが12.6mから30cm上昇し、12.9mになっていた。江戸時代後期の酒井氏時代に描かれた『姫路侍屋敷図』によると、調査地と西側の敷地は同じ屋敷地帯の中であり、これが城下町形成当初の造成によるのか、近代以降の削平を受けたものかは現時点では判断できず、周辺の調査データの蓄積が期待される。

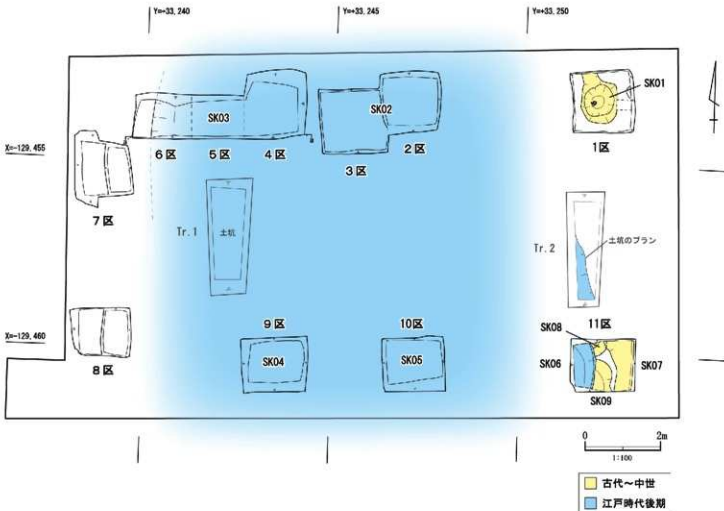


図3 調査区平面図 S=1:100 ※Tr.1、2は、確認調査



図1 4～6区 SK03断面図 S=1:50



写真2 4～6区 SK03出土遺物



写真5 8区 西壁断面(東から)



写真6 10区 SK05断面(東から)



写真7 11区 全景(北から)